

修理工事こぼれ話②⑤ 楼門の当初番付（化粧垂木の番付・その他編）

前々回のコラムでは柱と小屋束（こやづか）の当初番付（とうしょばんづけ）を紹介し、前回のコラムでは斗栱組（ときょうぐみ）の当初番付を紹介しました。当初番付のうち他に特徴的なものとしては、化粧垂木（けしょうだるき）の番付があります。今回のコラムでは、その化粧垂木の当初番付を紹介いたします。

1. 化粧垂木とは

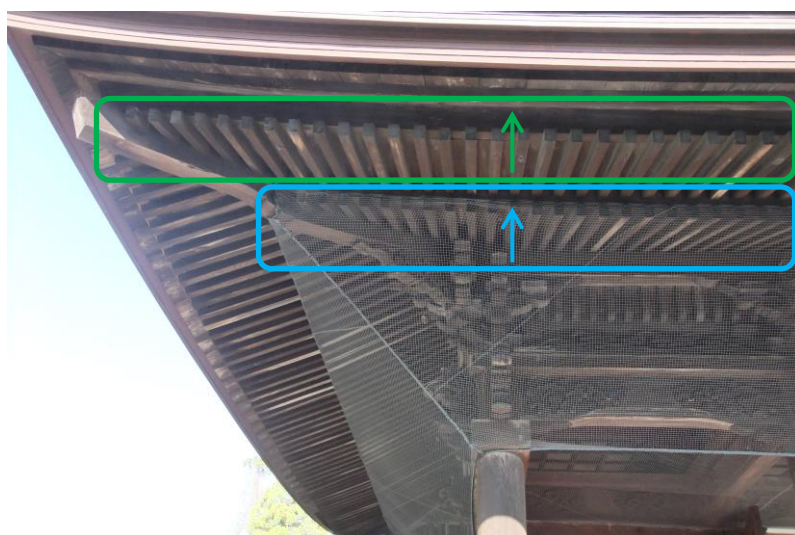
垂木とは、屋根下地を支える屋根の流れ方向に延びる棒状の部材のことをさしますが、寺社建築の中には野垂木（のだるき）と化粧垂木の2種類に分けているものがあります。野垂木は屋根下地を支えるための部材で本来の垂木の役割を担うものです。しかし、化粧垂木は軒下を見上げた箇所に取り付けられており、化粧垂木と化粧垂木の間に化粧裏板（けしょううらいた）を取り付けると屋根裏の空間が見えなくなるので、天井と同じような役割を担っています。なお、楼門の化粧垂木には、上層・下層ともに地垂木（じだるき）と飛檐垂木（ひえんだるき）の2種類があります。それに加え下層には正面中央に茨垂木（いばらだるき）があります。また、下の写真のように下層の化粧垂木はそれぞれ平行に取り付けられていますが、上層の化粧垂木は扇状に取り付けられています。



ちなみに、この部分〔軒唐破風（のきからはふ）〕の下面に取り付けられているのが茨垂木です。

楼門下層 野垂木

赤矢印方向に延びる棒状の部材が野垂木です



飛檐垂木

地垂木

楼門下層 化粧垂木

青四角で囲み、矢印方向に延びる棒状の部材が地垂木で、緑四角で囲み、矢印方向に延びる棒状の部材が飛檐垂木です。また、地垂木・飛檐垂木の間にある板が化粧裏板です。

2. 化粧垂木の番付墨書

化粧垂木の番付墨書は、上面に書かれていました。書かれている内容は大きく分けて、

- ①平面（ひらめん）か妻面（つまめん）か
- ②どの位置か
- ③地垂木か飛檐垂木か
- ④右側か左側か

という4種類のことが書かれていました。①について、楼門では正面・背面が平面、側面が妻面となっています。また、①は上層の化粧垂木にのみ書かれていて、下層のものには書かれていませんでした。②は漢数字で振られていました。③は、地垂木・飛檐垂木それぞれの別称である「母（おも）垂木」・「小軒（このき）垂木」*の「おも」・「小軒（このき）」を使用して分類されています。④はそのまま「左」「右」の漢字を使って分けられていますが、下層・上層で左右の振りかたが逆になっています。茨垂木は、②と④で番付が振られていました。



楼門上層 妻面地垂木 上面

写真に写っている墨書はすべて「妻〔漢数字〕おも左」と書かれています



「平廿五しんおも」

楼門上層 平面中央地垂木 上面

中心という意味で「しん」と書かれています



「小軒十番右」
「小軒拾壹番」

楼門下層 飛檐垂木 上面

「右」が抜けていたり、「番」がついたりしています。



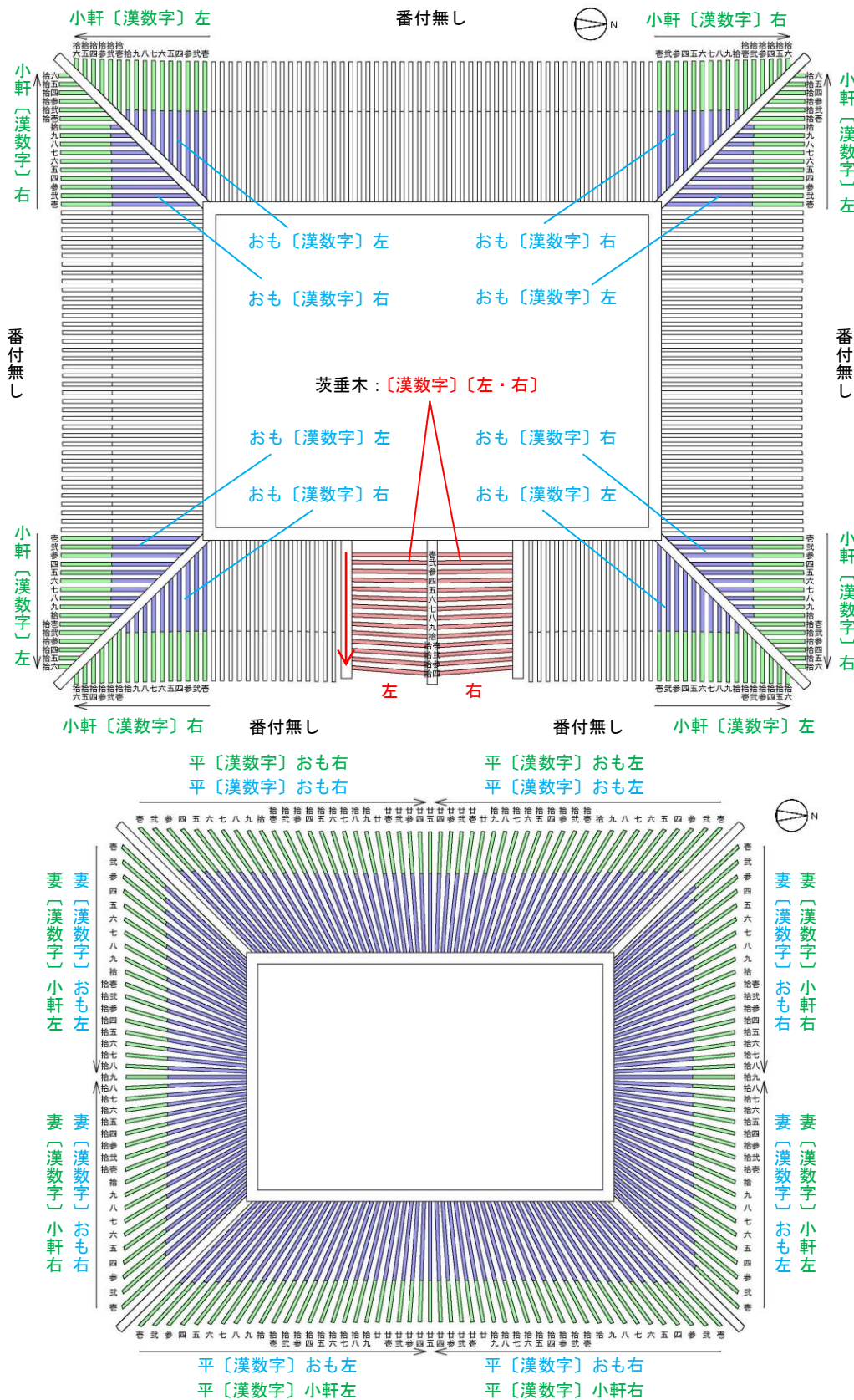
「拾 一」
「左 ば ん」

楼門下層 茨垂木 上面

ひらがなの「ばん」がついています。

3. 化粧垂木番付の振りかた

番付が書かれていないものや消えてしまっているものもありましたが、全体から判断し、伏図という上から見下ろした図で下層・上層ごとにまとめると、下図のようになります。



楼門化粧垂木 当初番付 (上図) 下層 (下図) 上層
 赤文字: 茨垂木の番付墨書 青文字: 地垂木の番付墨書 緑文字: 飛檐垂木の番付墨書

下層では、茨垂木は正面から見た状態で左右を振り分けており、楼門内側から「壹式参…」と番号が振られています。地垂木と飛檐垂木は隅の部分のみ番付が振られており、内側から「壹式参…」と番号が振られています。そして、建物の内側から見た状態で左右を振り分けています。

上層では、地垂木と飛檐垂木ともに隅から「壹式参…」と番号が振られています。そして、正面から見た状態で左右を振り分けているため、下層の地垂木・飛檐垂木とは逆になっています。

4. その他

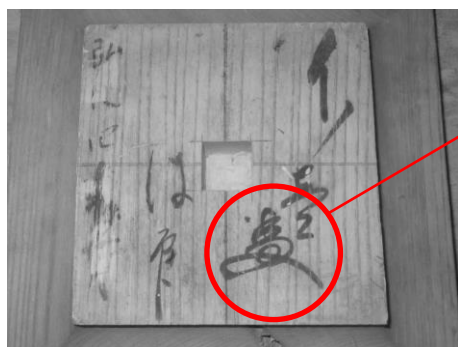
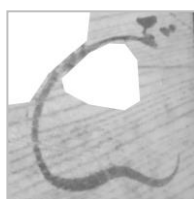
これまで3回にわたり当初番付について紹介しました。それらは墨で手書きされていますが、観察してみると筆跡に違いがみられました。そこで、今回の工事で写真撮影したもののの中から書体が異なるものをピックアップし比較したいと思います。「番」という文字が何度も出てきていますので、「番」を比較してみます。



①楼門下層 持送 上面
2画目が左払いになっています



②楼門上層 実肘木 上面
2画目が右はねになっています



③楼門上層 方斗 下面
かなり崩した文字になっています



④楼門上層 方斗 下面
漢字ではなくひらがなの「ばん」です

比較してみた結果、以上の4種類に分けることができました。番付を書く担当の大工さんが4人いた可能性があります。同一人物が書体を変えて書いている可能性もゼロではありません。番付を書く大工さんは、おそらく棟梁でなくともリーダー格の大工さんであると思われるので、言うなれば副棟梁にあたるような大工さんが3~4人いたのかもしれない。

* 中村達太郎著『日本建築語彙〔新訂〕』太田博太郎・稲垣栄三編、中央公論美術出版、2011
参考文献 清水真一『日本建築生産システムとしての番付の歴史の変遷に関する研究』私家版、1996